



悲願の天皇杯・皇后杯

（半世紀が過ぎる）

昭和三十七年、アナウンサーとして山口放送に入社し、翌年、山口国体が開催された。高校の文化祭で司会をしたのが担任の先生の目にとまり「君はアナウンサーに向いている。日大芸術学部新しく放送学科ができるのでそこを受験しては」と言われたことが私の人生を決めた。

得意なのは司会だけ。実況放送は苦手であった。昭和三十八年の山口国体で、ラジオ、テレビでどれだけ中継したか記憶にない。今年の山口国体の開会式の様子を山口放送テレビで見ながら、半世紀前の山口国体のことを思い浮かべた。開催県が天皇杯を獲得することが多い中、山口県は東京に敗れ、それが実現しなかったことだけはよく覚えている。



背景は自分の希望のものにできる

湯田温泉の湯で「足湯」のコーナーもある。大の大人がと笑わないで下さい。足を拭くタオルまで無料プレゼント。娘に「お父さん、ちよると記念写真を」と言われ、素直に応じる。ちよるは予想外に人気者で、我が家を訪れた人に見せると結構、話題となり、楽しいものである。下松市内の競技場だけでなく、食事会場となった公民館などにもプランターなどにサルビアなどが植えられて花一杯。これを用意した人たち、大会を支えたボランティアの皆さんの苦労は大変だったろう。好天に恵まれた体育の日を楽しく過ごさせてもらったことに感謝あるのみ。誰にお礼を言ったらよいのかわからないが、紙面を借りて心からお礼を申し上げたい。前回の山口国体から早や半世紀が過ぎようとしている。もう次の山口国体を楽しむことはありえない。過ぎ去れば人生とは本当に短いものである。最近思うことは、なるべく他人に迷惑をかけずにと十年余ぐらいしか残されていらない人生の一日々々を大切に、感謝のうちに生きたいということである。



花いっぱいのもニュメント

りある。二井知事は手づくりの国体と表現し

ていたが、下松では選手をホームステイで受け入れたので、特に思い深い国体になったと思う。

メイン会場の山口市の維新百年記念公園陸上競技場のすぐ近くに住む娘から「ちよるの広場は結構楽しいから遊びに来て」と言われ、体育の日に出掛けた。県内各地で競技が開かれるので、メイン会場



といえどもそれほど人が大勢という感じはない。同じような山口県の大イベント「きらら博」に比較すれば、人が少ないという印象を受けた。しかし、イベント広場に行く我々にとつては非常に楽である。例えば県内の観光地などを背景に記念写真を撮り、それを葉書にしてプレゼントしてくれるコーナーは長蛇の列と思いきや、待つこともなく、掲載の写真のようにでき上がる。娘と二人一緒なら三枚も無料でプレゼントしてくれた。